



障害者として行きました。

そして地元の優れた小学校の先生。

皆さん、心と教育を熱心に子供の立場で社会の立場で教育する先生は、子供たちにも絶対、信用があります。仲間にも信用があります。保護者にも信用があります。

あの先生に子供を預けておけば安心だという声が、私のどこへ返ってきました。その先生は、東京の教育委員会の推挙を受け、大学にも研修に行き、そして管理職に、推挙がありました。

私は相談しようと思ったけれども、私は相談しない。どういう道を選んだかって。私も子供もいるし、家内もいるから、管理職になって、校長になって、そういうことを考えた。

でも、それを断って養護学校に席をおいて、ある病院の病んでる人たちの教育に今、力を注いでくださっています。

時間がございませんので、今、当面起きている問題について若干述べておきたいと思います。東京都の中高一貫校。

10倍近い競争率で、入学している子たち。1年生の保護者や子供たちに落ち着きがない。私にぜひ話をと、こういう声もあります。

また、最近マスコミをぎわしている滋賀県の大津の問題や埼玉県や千葉県の問題。先生方は、どう受け止めているでしょうか。

東京都の教育委員会からも市町村の教育委員会も、これに対応しようとして、今、頭を悩ましています。

でも皆さん。

イジメが起きてから、それをどうするか。ということでは、真的問題解決にはならないのではないかと、私は思います。小さい時から、人を愛し、そして自分で色々して頂くのも嬉しいけど、人に何かしてあげることの喜び。

そういう教育を根本的に作り上げていくために、あの幾つかの事件は警鐘ではないでしょうか。教育者自らが、命と心の教育を、しっかり身につけて、子供たちに相対峙(あい

たいじ)する。

われわれ大人が、ちゃんと身につけて、過ちを犯さないよう。被害者も加害者も私は、被害者だと思ってます。申し訳ないと思っています。

こういう教育環境を、作って頂きたい。そして、優れた皆さま方はそれを行う力が十分にある。こう、私は信じています。

ハンセン病の100年の歴史と私の生きてきた、71年の生き様は。そしてこの資料館は、子供たちに生きる喜びと、命の尊さと、社会の一員として人生を送ること。そして何よりも、つらい時にそれに耐えられる体と心を作り上げていく。これが大事なのではないでしょうか。

そういう点では、私も日程が大変で、来月の1日まで日程が積んでおります。1日には、法務省関係の萩山の学校の子供たちが2回来ます。

そういう子供たちにこそ、生きる希望と、そして、未来を心に刻ませて一緒に勉強をしたい。私は、ハンセン病になりましたけれども、いまだに生まれ故郷には帰れないです。

両親の墓参もできないですけれども、唯一勇気を持って迎えてくれる小学校の母校の生徒たち。先輩として誰よりも誇れるといって、私を励ましてくれる小学校の母校の茨城県古河(こが)第2小学校。

この資料館にお小遣いを寄せ合って、1年に1回は来てくれます。私は子供たちに接する時、卒業式に、入学式に、運動会に、日頃、コミュニケーションを図っています。

そして私のこの知覚のない手と握手しながら、子供たちに生きる喜びを私の生きる喜びを伝えていかせて頂いております。大変、生意気なことを申し上げ、お願ひもし、心を傷付けたところもあると思いますけれども、私の子供たちに対する思いの一端を申し上げ、子供たちをよろしくお願ひしますということを、最後に結びまして、私の話を終わらせて頂きます。

どうもありがとうございました。



発行日 2013年3月29日
編著・発行 国立ハンセン病資料館

国立ハンセン病資料館語り部活動

平沢保治さん講演

教員編

～命と心と平和の教育を～

2012年7月25日収録

こんにちは
ハンセン病って何なの?
全生園ってどういうところなの?
こう思って来たかたも多いと思います

1 ハンセン病はどんな病気?

皆さんこの地上に奇跡的に選ばれて、命を授かっています。

命が授かっても、生きなければならない。生きるとは何なのか。命とは、何なのか。

この原点に立って、21世紀の大切な財産、宝ものである子供たちに1人の人間として、困難に立ち向かい、それに耐える。

皆さん、あの真珠、すなわちパールの輝きをどのように眺めているでしょうか。

あの真珠貝は、あの石を抱えて海中で何年も苦しみ耐え、そしてあの輝きを生み出している訳あります。

人生の99%は、苦しみであり、そして耐える。人を思いやる日々ではないでしょうか。

私は、14才でハンセン病と宣告されました。1年で病気が治って学校に戻れる。こういう日本の最高権威の医学者から告げられ、それを信じてこの多磨全生園に今から71年前(1941年)に入所致しました。

ハンセン病という病と社会にある偏見、差別。これに立ち向かって生きて参りました。

ハンセン病は、かつて癲病と言われました。信仰を誹(そし)るものは白癲(びゃくらい)になる、こういう記述があります。

また、光明皇后(こうみょうこうごう)が癲患者を風呂に入れて、膿を流したと、1000人目の患者が仏であつたって、こんな言い伝えもなされているように、病の中で最も社会から忌み嫌われる病の一つだった訳あります。

そういう中で、今から139年前、1873年、明治6年にノルウェーのハンセンによってらい菌が発見されました。

らい菌は、結核菌に似た抗酸菌の系統であります。

結核菌と同じながら結核と違うことは、簡単に人に感染しない。

だからかつては、業病(ごうびよう)であり、天刑病であり、血統病だ、こう言い伝えられてきた訳あります。



2 隔離と収容

では、なぜうつりにくい病気が、今日(こんにち)まで厳しい差別が残っているのか。ちょうどいい菌が発見された時、明治の初期、日本ではコレラが蔓延しておりました。

東京の小石川の渋沢栄一院長の奥さんも明治15年にコレラで亡くなっています。

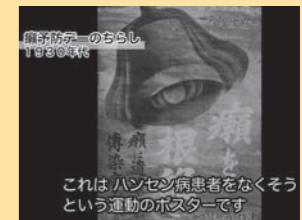
コレラと同じような感染力がある。また、江戸時代から明治に入って、一般の人たちが戦争に参加させられ、富国強兵、日清日露の戦争に勝ち、西欧先進国に追いつき、追い越せという国の指針の中で、癲患者は国を滅ぼし、役に立たない人間として、これをどうなくしていくか、なくしていくというより、撲滅政策をとった訳であります。

この法律こそ、昭和6年に作られた、癲予防法です。

ハンセン病に感染した全ての人を国が作った療養所に、強制的に収容し死ぬまで外に出さない、という法律でした。

ハンセン病が発症すると手足などの末梢神経がマヒしたり皮膚に様々な変化が起こります。

これは、ハンセン病患者をなくそう、という運動のポスターです。



当時、ハンセン病はコレラやペストと同じような恐ろしい伝染病と考えられていました。そのため、患者たちを隔離する無癲県運動が、全国でさかんに行われたのです。

ハンセン病患者たちは大人も子供も、まるで犯罪者の



ように各地の療養所へ収容されていました。患者たちが収容された療養所は療養所といつても不十分な治療しか行いませんでした。

た。また、衛生状態も非常に悪いところでした。療養所の周りは高い垣根で囲まれていました。患者が簡単に逃げ出さないようにしたのです。

収容された患者は仕事をさせられました。患者が患者の面倒をみたのです。

食べるのも、自分たちで作らなければなりませんでした。

子供も、目の見えない人でさえも働かされました。

その上、園が勝手に決めた規則を破ると罰を受けました。これは、処罰のための監房です。平沢さんは14才でこうした療養所に入所しました。



明治40年、1907年に制定された法律によって、公立の療養所が青森、東京、大阪、香川県、熊本県にできました。

でも療養所とはいっても、療養者は刑務所に一等減じた形の施設でした。

皆さん、刑務所は刑期が終われば出られます。私たちは、一旦「癪」という宣告を受ければ、それが誤診であっても生きて再び社会に帰れない。ふるさとに帰れない。

それを強行すれば、所内に牢獄を作り、園内の労働は患者の労働によって一切まかなければなりませんでした。

また女性は、男性に比してハンセン病の発病率3分の1。

所内を円滑に運営するために1915年、大正4年に8人の雑居部屋、2階に展示してありますけれども、

この女性の雑居部屋に“通い婚”といって、男性が夜だけ泊まりに来る。一緒にご飯を食べることも、語らうこともできない。獣と同じような性生活が求められた訳であります。

子供を産んではいけないということで、断種手術。女性が妊娠して、園内で生まれた子は、その場で息を止められ、その証拠として、5年前に、ホルマリンづけの赤ん坊の遺体が35体も園内の倉庫の中から発見されました。

人間の生物の最も尊厳を重んじなければならない、性の問題までも、癪撲滅政策に役立たせたと、こう言っても過言ではないのではないかと私は思っています。

そして、1919年には園内のみ使える園内通用券、一般



お金を持たせない。これは戦後1952年まで続きました。

また所内には、10メートル近い丘があります。

この丘は、大正11年から3年間、垣根の外に逃亡を防ぐために堀を掘らせた。この土を患者たちが何とか役立たせたいと3年がかりで10メートルの丘を作りました。

その丘の上だけ外が眺められた訳であります。

療養所だというのに、医療機関という名のもとに療養所の中には患者が火葬する火葬場があり、患者を取り締まるための監獄、お寺、納骨堂もあります。

今でも4100人あまりの人たちが死んでもふるさとへ帰れない、こういう状況が生まれています。

満州事変と同じ年に癪予防法が改正になり、無癪県運動が始まり、この東村山から三多摩から東京から日本から、癪患者をなくそう。

白衣を着たお巡りさん、お医者さんが、村々を患者たちを探し、患者が発見されると牛馬のような貨車や客車を借り切って、療養所へと送り込み、残った家は真っ白になるほど消毒をうける。

癪は怖いんだ。あなたたちを守るために。こういう施策が続きました。

所内も大変でした。結核患者はおいしいものを食べて安静をとって、いい空気を吸う。

私たちは四分六分(しぶろく)といって麦が六、お米が四。肉は正月に少々。卵も1年に1個ぐらい。朝は患者が作った野菜、昼は漬物、夜は患者が作った野菜。

魚もイワシとか同時にニシンがウンとされた。これらの半分、賞味期間が切れたような魚を食べていた。これで病気がよくなるはずはありません。

無癪県運動で、1万床増床とかっていう名目で8人の部屋に10人入れる、8人のご飯を10人で食べる。こういうことが行われました。

皆さん、2間半のところに4つ布団を敷いてみてください。子供が寝てもですね、寝返り打てば分かるんです。そこに既婚者と結婚してる人が一緒に夜を過ごす。「通い婚」といってこういう状況で園内は、すごく騒々しくなりました。

これを鎮めるために、1938年に草津に重監房が作られました。

草津というところは、夏は涼しく、でも冬はマイナス16度にもなる。この療養所では、園に歯向かったり、不自由な人たちを看護したり、お茶を入れてあげたくても、燃料をくれない。園内の木を1本切ったというだけでも、牢につながれ、そして園長が「草津に行くか」と言われればそれは死刑を



宣告されるのも同じであった訳であります。

3 全生園の生活

そういう状況の中で、先程も申し上げましたように私は昭和16年、この多磨全生園の門をくぐりました。

強制収容ではございませんけれども、東村山の駅から4時間がかりで武藏野の雑木林、草虱(くさじらみ)を学生服に付けながら、やっと辿り着きました。

昭和16年12月24日。今まで、クリスマスイヴ。でも門前に立って入園を告げた時、入園にあたって名前をどうするかということです。

「何で入園にあたって名前を変えなければいけないんですか」

大多数の人たちは変えて入ってる。私が入った時は1300人、今250人の内の、90%以上の人人が今でも戸籍に載ってる名前を名乗っていない。

なぜなのかって、社会から知識や財産は努力をすれば報いられる。ハンセン病患者を肉親に持った家族は、血統、血筋は一生つきまとという形で、結婚や就職や、そして子供の進学にもかつては影響を与えられた。

家族を守るために私たちはこの地上に生を受けた名前を名乗ることもできなかった訳であります。

収容病棟では、消毒液の風呂に入れられ、着てるものは全部消毒され、そして患者の介護人によって私は療養所の一夜を明かしました。

小さい時から泣き虫で母におぶされて小学校に通った私。幾日も幾日も、泣き明かしました。正月が終わって、少年寮に移されました。

ハンセン病は、乳幼児期の免疫性の弱い時に感染して、思春期に発病する。

1万人に1人、菌が入る。その1万人、菌が入った人の1人。でも当時は、子供の発病者多かった訳です。

1300人で80人ぐらいいました。少年寮には18畳で10人以上の人が雑居部屋。一切の生活は当番でやらされました。

便所掃除、おかげで掃除、部屋の掃除。

そして療養所では、子供でも大人でも目が見えなくても、足がなくても、指がなくても仕事をやらされました。

入所者が仕事をしなければ療養所が運営できない。

今、入所者250人で、380人います。私が来た時は入所者1300人で、職員50人。看護師さんは10人ぐらい。今、250人で153人が定員です。

これは私たちが生きるために、国に交渉し闘い、築き上げてきた数字であります。

そして、第二次大戦。軍国少年として鬼畜米英と癪患者であっても戦える人間になれと。私は竹ヤリで米兵を突き殺す訓練をさせられました。

平沢さんが療養所に入った頃、日本はアメリカや中国と戦争中でした。戦争が激しくなると

日本も攻撃を受けるようになります。被害を受ける療養所もありました。



だんだん戦争も悪化し、空襲も激しくなりました。

食べものもだんだんなくなる。でも、少年寮でもすごいイジメにもありました。

私は、なぜイジメられるか。ここへ連れてこられて肉親が面会にも来ない、何も送ってくれない子供が多い。

私は母が命がけで警察の目をくぐって下着に小さい袋を作って、お米を運んで清瀬の駅からたった10銭のバス賃を惜しんで、私のところへ通って来てくれた。

それが面会に来ない人にすれば面白くない。来ると取り上げられる。当時は手紙も全部開封され、送ってきたものも全部監督さんに開けられて、検閲され、そしてタバコも全部巻きタバコは不良患者は吸ってはいかんということで、私たちはタバコは吸わなかつたですけれども、そういう状況でした。

昭和17年、5月17日。私はすごいイジメを受けて、今でも耳の後ろに穴が空いてます。今晚、一晩もつかもたないか、そういうイジメを受けました。

でもそういうイジメに耐えられた、それは病気を良くして学校に戻り、社会に帰りたいという願いと、卒業式に、今でも持てるんですけども、昭和14年に先生が書いてくれた「平沢くんへ。努力しなくていいから諦めないで生きてほしい」この言葉、一行。皆さん、生意気なようすけれども教育のおかれてる状況っていうものを、考えてみてください。皆さん方のおかれてる状況っていうものを、考えてみてください。

私は優れた担任の先生を持った。だから、怨念は怨念で返さない。怨念を怨念で返しては、未来がない。赦す心にこそ、未来がある。

こういう思いで耐えました。戦争もだんだん激しくなり、1日1食、さつまいも半分。じゃがいも1個。それも食べられなくなつて時間がないから詳しく述べませんけど、人間の肉以外、食べられるものは、獣でも草でも、何でも食つて戦

争に協力し、生き延びて参りました。

近くにB29が撃ち落された。地面に大きな穴があき、負傷者が出了。助けに行く人はいない。外は全部、年寄りと子供。全生園には若いが兵隊に行かない連中がいる。あの人たちに手伝ってもらいたい。

私たちも療養所の中では、餓死しても靈安室には、板がないで棺桶ができない。私は、園内の竹を使って、竹のカゴ作りの仕事をさせられました。カゴの棺桶を作りました。

外でも患者が来たら病気が怖い。でも背に腹代えられない私たちも、そななとこへ穴埋めや不自由な人を片付ける。そななことはしたくない。

でも、外に出られる。桟の垣根から外に出られて、自由な空気が吸える。皆さん、皆さんは戦後生まれの大半な方たちです。自由というものを、身をもって考えたことはないでしょう。

私のこの曲がった手、後遺症の顔、皮膚には、「自由」というものがどんなに素晴らしいかということを、あの戦争中、体験致しました。

そして、あの敗戦。私はやけになって、無賃乗車して池袋や浅草のヤミ市に行って、今、子供たちに立派なことを言えるような人間ではない状況に陥っていました。

でも私は、子供たちや皆さんに問い合わせます。

どんな過ちがあっても、どんな過去があっても人間として生きようとする時、それは、過去の傷は、後に残るものではない。

こう私は考えて、子供たちに接しておりますけれども、皆さん方はどのようにお考えでしょうか。

4 特効薬プロミンの出現

それがたたって私は病気が再発していました。

大風子油(たいふうしゆ)という痛い注射。今も両腕に油が入っています。

その時に鬼畜米英と言われたアメリカで結核のために作ったプロミンという薬が、結核には効かないが、ハンセン病に効くということが日本の学会で発表されました。

でもその薬が日本に入ってくる訳じゃない。当時は、東大の石館守三さんという青森の薬学博士が、私たちに体に合ったように自分で考え出して日本で治療を始めたのが、1948年。あっという間に病気が良くなりました。

でも国はその予算を作ってくれない。そうでした。

癪患者は療養所の中で死んで、煙突の煙として社会に帰る以外に道がなかった時代です。

私は母は土地を売ってお金を送ってくれた。喜んで、そして治療を受けました。

今でも両腕に青いアザがあります。



しかし、悲しいかな。らい菌はいまだに菌を増やす培養ができないんです。

培養が成功すれば、ノーベル賞、間違いない。ハンセン病は、世界の感染症疾患としては終焉を迎えるとしています。

どのくらい治療していいか分からず。

薬の量を間違って手に後遺症を残しましたが、菌はあつという間になくなりました。

昭和50年。それ以来、私はいまだにハンセン病の治療はしていないんですけど、菌はいつ検査しても出てきません。

カゴ作りができなくなり、社会復帰を諦めて1950年、昭和25年に結婚致しました。結婚の条件としては2年前に制定された優生保護法で、私たちは子供を持つことを法律的に許されない。

日本だけの過ちがそこに繰り広げられた訳です。

1948年、国連では人権宣言。日本ではその前に新しい憲法が発布されました。

日本で優生保護法が、昭和15年1940年に制定された時は私たちはあの戦前でも、法律で子供を持つなど言われなかったんです。

私は断種手術を受けて、子供を持つことを法律的に阻まれました。私が今、21世紀の宝ものは何から、お金でしょうか。ものでしょうか。知識でしょうか。これも必要です。

でも、私は子供たちに問い合わせます。

学校の校長先生、立派です。副校長先生、担任の先生、保健の先生、給食のおばさんたち。学校に来られるように見守ってくれる地域のおじさんやおばさんたち。

そして何よりもあなたたちがいるから、学校は成り立っていく。校長先生がいくら1人で立派でも学校は成り立っていない。

人間は、一人ひとりおかれてる状態で果たす任務と役割がある。パンを作る人、食べる人、売る人、家を建てる人、住む人、車に乗る人、運転する人、作る人。

これがあって、社会は成り立っていく。どの状況にあっても、与えられた状況から、人に喜ばれることをすれば、必ず成功し、自分も幸せになる。こういうことを問い合わせています。

3つの約束。

1つは、夢と希望を持つこと。

2つ目は、「ありがとう」と言える人間になること。

3つ目は、この地上に両親から頂いた命、奇跡的に。これを絶対に粗末にしない。自分に至らんところは、人の力を借りる。

これは、恥ずかしくない。言ったり、力を借りない方が恥ずかしいことだ。小学校4年生、5・6年生、中学生、高校生分けて、その中で一番真面目に聞いて約束を守ってくれるのは、小学校生です。

特に4年生、5年生、純情です。

旺盛な好奇心と探究力のある子たちに、命と心の教育を徹底すること。

これが、大事ではないかと思いますけれども、先生方はどのように受け止めておられるでしょうか。

5 自由と平等を求めて

私はそういう中で、らい予防法の改正やハンセン病じゃなくて結核や精神や肢体や中途障害者のそうしたハンディキャップを持つ人たちとも、スクラムを組み、お互いにつらい思いをしてる人たちが肩を寄せ合って語り合い、改善して世の中を良くしていくこと。このことによって、ハンセン病問題を理解して頂こう。

こういう風にして生きて参りました。

ハンセン病が治る病気になったことで全国の療養所では、法律の改正や生活の改善を求める運動が起こりました。

平沢さんも、こうした運動に積極的に参加したのです。

しかし、隔離政策や患者に対する差別や偏見はすぐにはなくなりませんでした。



1960年代。あのオリンピックあった時代。でもこの地域では、出て行って、清瀬からタクシーに乗っても全生園って言うと、お断りされました。

この近くの店では、ものを売ってくれませんでした。

昭和53年。1978年まで私が障害者運動をしているということで、この地域は、東村山の市役所を含め、職員に特別手当が、支給されていました。

私は、でもいつかはこういう困難を切り開くのは、自らが切り開かなくて誰が切り開いてくれるだろうか。自転車に乗っ

て、三多摩東京中を飛び歩きました。

知覚麻痺があるために、昭和40年、大病を病んで、今のような後遺症を残してしまいました。私の動くのはこの2本の指だけです。

90%は知覚麻痺、大きい声をしてあなた方は怒鳴って、叱られているように、感じるかもしれませんが、喉も麻痺してるから小さい声ではしゃべれないんです。かくれるでしょうでも私もその時は、死のうかと思いました。でも、それから立ち上がり、右手で字が書けなければ左手で。左手で字が書けなければ、口で足で。

足で書けなければ、口述筆記で。

小学校しか出でない私。本を4冊、来春(らいはる)は5冊目を。今85、4才ですけれども、書こうとしております。

6 皆さんへメッセージ

平沢さんたちが周囲の理解を得るために、続けた地道な活動は平成8年、らい予防法の廃止という形で、実を結びました。

しかし、長過ぎた闘いで入所者たちは高齢となり社会復帰を果たせずにいます。

現在の多摩全生園です。

多い時には1200人以上が暮らしていた全生園も2012年5月31日現在、入所者は255人。平均年齢は80才を超えています。

全生園では、ハンセン病問題の歴史を伝えるため入所者の生きた証を残す活動をしています。

こちらの山吹舎は、かつての独身男性寮を復元したものです。

つらい思い出の染み込んだこの場所も今は、人々のふれ合いの場となりました。

入所者である平沢さんも、子供たちとの交流を大切にしています。

この部屋に私、7人で生活してたんだよ。朝起きてね、布団をあそこに入れるの大変なの。押し入れが狭いから。

ハンセン病問題を正しく理解してほしいという願いを込めて平沢さんは交流を続けています。



平成8年 らい予防法の廃止という形で実を結びました